

研究例会報告

〈第 372 回〉

日 時：2021 年 12 月 11 日(土)19:00~20:30

会 場：オンラインで開催(Zoom)

テーマ：公立小学校と GIGA スクール

発表者：宮澤優子氏(長野県高森町立高森北小学校・
高森町子ども読書支援センター司書)

参加者：77 名

「公立小学校の学校図書館と GIGA スクール」のテーマのもと、報告者の勤務する学校図書館などの事例を紹介、検討を行った。

さまざまな館種からの参加があったため、まずは学校図書館の機能、統計情報から見る学校図書館の現状や問題点などの共有を図った。公共図書館とは桁違いに少ない資料費や関係職員の任用の不安定さから、設置は義務である学校図書館が図書館としての機能をどこまで果たしているのか？という視点を持っていただこうと考えたためである。

続いて、これらの課題を解決するために設立・稼働となった高森町子ども読書支援センターについて紹介した。学校図書館に不足している「物」「人」「場」を、町内の図書館的資源のフル活用により補完し、公共図書館側にとっても児童サービスのための知恵やサポートを学校側から受け取ることができるなどのメリットがあるこの「しくみ」の詳細と、稼働から現在までに取り組んできた活動を報告した。また、このセンターの支援を受けた現在の高森北小学校の学校図書館運営について触れ、行政や学校教育の中にある学校図書館が、センターを軸とした連携の中で町の掲げる教育を見据えて活動している体制を知っていただいた。

さていよいよ本題であるが、高森町では今年度から GIGA スクールが本格稼働し、高速通信回線、クラウド、一人一台の端末、という環境が整えられた。学校図書館はこれを好機と捉え、より一層の機能充実のために取り組んでいる。

まず GIGA スクールによる学校図書館への影響は？という、これまで学校図書館が子どもたちとつないできたさまざまな「つなぐもの」とその「つなぎかた」が大きく変化したこと、といえるだろう。例えば、これまでは「本」であ

れば、紙ベースのいわゆる「本」の提供しかできなかったが、電子書籍やデータベースなどのデジタル資料の提供も可能となった。デジタル資料には読み上げ機能や文字の拡大など、紙の資料にはないアクセシビリティがあり活用シーンが広がる。また資料とのつなぎ方も格段に手段が増えた。本であれば OPAC をはじめとした検索ツールの利用が可能であるし、書店サイトやインターネット書店、出版社のサイトなども使える。こういったサイトのレコメンド機能は、自分の嗜好や読書力にあった本を探すスキルがまだまだ低い子どもたちにとって、思いがけない出会いを生む。また調査のための資料も、各種専門機関の公式サイトやデータベースからの情報の取得が可能になり、中には全文 PDF でダウンロード可能な資料もある。図書館へ足を運ばずとも資料の検索が可能で、自分の端末で、自分のタイミングで、自分自身でそれらの情報とつながることができる。

さらに「人」や「コミュニティ」とのつながり方も大きく変化した。ウェブ会議システムを使えば移動距離も移動時間も考える必要がなく、すぐにつながれて先方の拘束時間が短時間で済む。今までとは比較にならないくらい容易になったので、限られた授業の中でのゲストスピーカーの採用も可能だし、そのための打ち合わせですらオンラインでリアルタイムのやり取りができる。「本」「人」「コミュニティ」など、提供可能な範囲が一気に広がり、提供手段も増え、学校図書館こそ視野を広く柔軟にもたなければ従来型のサービスの提供にとどまってしまうだろう。

最後に、GIGA スクールの登場による情報活用能力の変化についてもお話した。タイピングや端末の基本操作方法という「道具」として使うためのスキル、デジタルシティズンシップ教育・著作権教育などのモラルやコンプライアンスについて知り自ら考えて行動するためのスキル、インターネットやデジタル情報特有のメリットデメリットを理解し、それに対処するためのスキルなど、これまでに扱ってこなかったものが、あまり悠長なことは言っておられず今すぐ必要とされる状況にあるのは確かであり、喫緊の課題であると認識している。

質疑応答では、踏み込んで詳しく訊きたいというポイントをいくつか挙げていただいたので、それにお応えした。日頃の児童会運営での様子、図書委員会が企画して実施している「おでかけ図書館」（＝出張貸出＋デジタルコンテンツの展示）でGIGAスクールをフル活用している児童たちの様子など、具体的な活用事例を提示した。

また、資料のデジタル化が進むと図書館という「場」の意義は？という投げかけもあった。学校図書館法に定義されている「設備」としての図書館は果たして今後どうなっていくのだろうか？その「機能」について捉えなおさなければ、存在意義そのものが問われる時代が来るだろう。

土曜日の夜であったにもかかわらず多くの方にご参加いただき、沢山のご意見やご感想をいただいた。私も新たな視点をいくつかいただいた。また次へ進んでいきたいと思う。

（文責 宮澤優子）